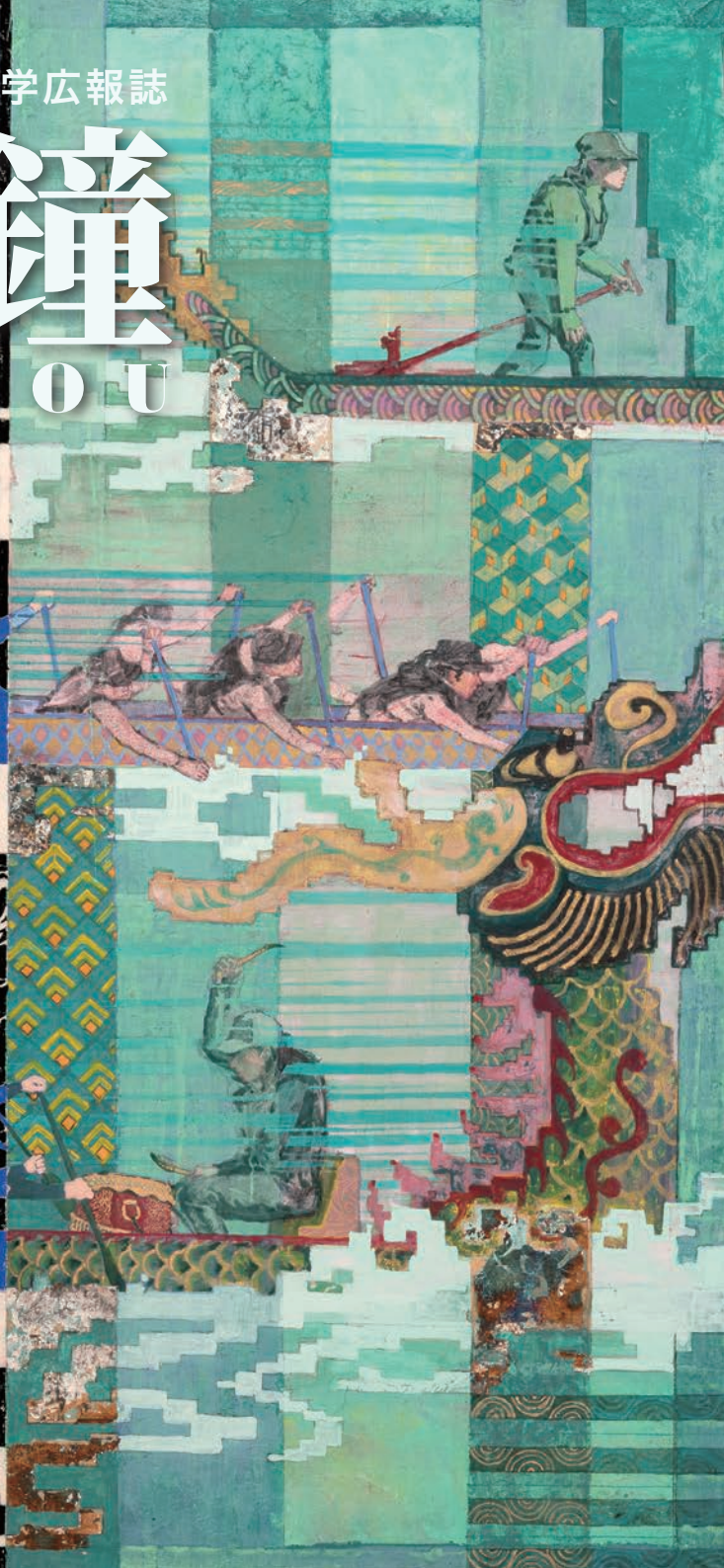


沖縄県立芸術大学広報誌

開鐘

K E - J O U

Vol.28



美術工芸学部 美術学科
絵画専攻 教授

知花 均

『開鐘』に退任の挨拶の機会をいただきありがたく思います。草創期から長年、職責を果たすことができたのは、これまでの教職員の皆様のご指導とご支援の賜物と深く感謝しております。そして教職員や学生たちとの出会いは何にも代えがたい思い出であり尊い宝物です。特に創作活動を通じた学生たちとの出会いは何よりも大きな喜びでありました。

絵画専攻は日本画と油画の二分野が背中合わせに少人数精鋭で教育カリキュラムを実施してきました。油画教員であった私自身も日本画の教員と親しく伝統的な素材について教えてもらったり、大事な示唆をいただいたり、彼らの寛容な人柄や絵を描く姿をまじかにできたことはよい経験でした。また、油画の教員とは同僚として現代社会の美術家の役割と思索、多様な美術のありようを沖縄の地で共に探り、創作と発表の場を共有しながら、国際的な交流事業を経験できたことはよかったと思います。これからも世界に仲間を広げて関係を持ち続けていくことは大事なことであり、相互に繋がって文化の懸け橋となっていきたいと願っています。



退任後は作品制作にこれまでとは違ったある種の静けさを持つことができるものと思います。また、美術家として地域社会での役割をいくらかでも担っていきたいと考えています。地元である読谷村は戦後すぐに独自の文化村構想を村長が導き、村民が主体となって今日に至っています。米軍支配に対し、自らの尊厳と文化を誇り高く掲げ、日本国憲法の理念を拠り所にしてきた歴史があります。平和を創ることの手本、模範を見る思いです。沖縄に生きる者としてまっすぐに立ちたくて担っていきたくて念じています。

世界は刻々と変化し、以前とまったく異なる空気に変わりつつあるようです。これまで以上に私たちは、互いの尊厳を守り、共に生きることができかどうか、そのことが問われる時代に入っていくように思います。肝、急所がここにあるのではないかと思います。美術にはたくさんの課題や問題がありますので本学の学生や卒業生が創造の翼をはばたかせて、人々が共に生きる世界を構築していっていただけるように。本学のますますのご発展を祈念いたします。

美術工芸学部 美術学科
芸術学専攻 教授

小林 純子



私が沖縄県立芸術大学に赴任してから、27年が経ちました。長いようで短い27年間でしたが、多くの方が助けてくださったおかげで、無事に定年退職を迎えることができました。

赴任当初、最も戸惑ったのは、戦前の作品と文献資料の少なさです。これらは沖縄戦で失われたわけですが、美術史の研究は作品を実見することから始まり、また文献資料も重要な手がかりとなります。それが沖縄では戦前の研究は写真を頼りとし、文献資料は県外国外に求めなければならなくなり、茫然としたのを憶えています。これが地上戦が行われたということなのだ、思い知りました。

以前は幕末から近代の日本美術を研究していたのですが、このような事情で、沖縄では現代美術や工芸も研究の対象となってきました。作品の背景には沖縄の歴史や文化、社会や政治、信仰などが横たわっていて、いまだに解明できないことばかりですから、これからも研究を続けていけたらと考えています。

大学での教育においては、芸術大学という作品が生まれる現場で教える幸せを日々味わいま

した。芸術学専攻の学生たちを教え、また彼らと議論するのもとても楽しかったのですが、絵画や工芸を専門とする博士課程の学生とともに、制作と理論の結びつきを考察する時間は心躍るひとときでした。学生を指導しながら、作品の造形だけでなく、素材や技法から作家の意図や芸術思想を解明していく方法を学ぶことができました。いくつになっても新しい学びがあるものですね。

私が美術工芸学部長の職に就いたのは、新型コロナウイルス感染症が日本でも流行し始めた2020年春でした。大学は閉鎖され、オンラインでの授業を可能にする対策に追われました。皆様のご協力で、本学では大きな集団感染は起こりませんでした。パンデミック期間が過ぎても元に戻らなかったこともあり、当時の対策が正しかったかどうかを考えると、心が晴れません。

このように様々なことがありましたが、27年勤めた今でも、沖縄県立芸術大学は可能性に満ちた学び舎だという考えに変わりはありません。これまでのご厚情に深く感謝し、大学の益々の繁栄と皆さまのご健勝をお祈りしております。

美術工芸学部 デザイン工芸学科
デザイン専攻 准教授

笹原 浩造

早朝の鳥たちの囀りが夜明けを呼ぶこの季節、
大学は卒展、一般入試、卒業式、入学式と、沖縄
の新春行事づくめです。

赴任以来、崎山キャンパス新設移転や開学30周
年を過ごした。関わった開設記念品ギフト、大学
入試や広報表誌ビジュアル、研究成果展、サマー
スクールのグラフィックデザインワークショップ
を提供してきました。

テーブル(写真)は、デザインとアートディレク
ションの活動実績の印刷物で、沢山の思い出
が詰まっています。コロナ禍を乗り越えて展示・
記録した一部です。



数々、多くの関わり合いに感謝致します。一見、羅
列集積に見える研究成果群は私的なチャンプ
ル「美学の軌跡」と思っています。

企業から移籍・赴任した私には、大学専攻の
研究・領域を知る機会になりました。入試採点合
否、課題講評、成績評価の履修実情を知りまし
た。また、裏方として履修困難な学生に手厚過ぎ
ると感じる程の履修支援は印象的でした。今は
芸大らしさと思えます。約15年間で震災津波、
海外テロ、コロナ渦対応、軽石漂着、紛争社会、
など想定外の自然環境・社会背景など日常変容
が有りながらの、在宅待機やオンラインや授業
制限に迫られ、自分の人生観、役割や価値観に
時代からの薫陶を受けました。

また、朝日新聞社デザイン部次長戸田様、イオ
ントップバリューデザイン元部長有様、トヨタ自
動車デザイン部部長長屋様(当時)ヤマハ楽器
デザイン部ディレクター峰様、ポーラ意匠研究所
所長碓井様(当時)、日本郵便・切手はがき室デ
ザイナー玉木様、コイズミ照明デザイン部西川様
(当時)、浦添市美術館宮里元館長・糸数現館
長、元ブルーシールアイスクリーム社長米山様、
ゆいまーる沖縄社長鈴木様、他、方々の授業への
惜しみない協力に感謝いたします。(株)省略
大学創立40周年、おめでとうございます。



全学教育センター
教授

森 達也

私が本学に職を得たきっかけは、2014年9
月に日本貿易陶磁研究会・沖縄大会に出席した
ことでした。懇親会の席で、沖縄県立埋蔵文化
財センターの調査員であった新垣力氏(現、沖縄
県教育庁文化財課記念物班長)が、芸大での博
物館学課程教員の公募情報を伝えてくれたので
す。当時は愛知県陶磁美術館(旧名:愛知県陶磁
資料館)で学芸員として勤務して21年目で、学芸
課長になってまだ1年も経っていませんでした。た
だ、2005年頃から調査・研究目的で毎年よう
に沖縄に来て若手考古学者たちと交流していた
ことから、この公募に強く心を惹かれたのです。
すぐに応募書類を整えて郵送したのですが、締切
りまで時間がなく大慌てでした。面接を経て、12
月後半に採用内定の連絡がありました。ちょうど
この時は半月ほどイランのペルシア湾岸で遺跡の
踏査を行っており、外部との連絡が不自由なた
め数日おきにネットが通じる店でメールチェック
をしていたのですが、家人からの採用連絡があっ
たことを伝えるメールを読んだときには飛び上る
ほど嬉しかったことを覚えています。

2015年4月に沖縄に赴任してからは、全学
教育センターでの博物館学課程の運営と講義、
附属図書・芸術資料館の学芸室長(2019年か
らは館長)業務、大学院での学生指導、自らの
研究を4つの柱として活動しました。博物館学
課程では11年間で延300人ほどが学芸員資格
を得るのを指導し、芸術資料館では「京都と首
里」展(2015)、「アジアの中の沖縄陶磁」展
(2016)、「組踊の誕生と展開」展(2019)、

「1972年開催『50年前の沖縄』展と鎌倉芳太
郎写真の今」展(2022)、「御後絵展」(2025)
などを企画したほか、国庫補助金による鎌倉芳
太郎資料の保存修復事業を担当しました。大学
院では陶磁史や陶磁考古学を学ぶ修士と博士課
程の学生を指導し、6人の博士を世に送り出すこ
とができました。研究活動では前から続けてい
た陶磁史、陶磁考古学とともに沖縄考古学の研
究を進展させ、沈船遺跡の水中調査、グスク時代
の遺跡発掘などを実施しました。海外での調査
や研究発表、学生の研修旅行にも力を入れ、海
外渡航は11年間で108回にのぼります。そのほか
には、2022年から首里城復興の技術検討委員と
して再建に深くかかわっています。

本学で教鞭を取った11年間は楽しいことの連
続で、自分の人生の中でも最も輝かしい日々とな
っております。一緒に時を過ごさせていただいた
学生と教職員の皆様、ほんとうにありがとうございました。



台湾彰化県崙寮遺跡にて(2026年2月)

ひがれお

「六本木クロッシング2025展」に新作品



本学修了生であり、美術家として活躍中のひがれお（2020年、造形芸術研究科絵画専修修了）さんが、森美術館（東京都・六本木）で開催された「六本木クロッシング2025展：時間は過ぎ去る わたしたちは永遠」（2025年12月3日～2026年3月29日）の出品作家として選拔されました。現代アートを専門にする森美術館において、3年に1度開催される「六本木クロッシング展」は、日本の現代アートシーンを総覧する定点観測的な展覧会として位置づけられており、現代アートの現在地を考える上で、極めて重要な美術家として取り上げられた、ということになります。なお、全21組の出品作家のうち、最年少作家とのことです。

本展覧会でひがれおさんが出品した作品は、継続的に取り組んできたシリーズの最新版である、「琉球人形あつめ in 内地」です。「琉球人形」は、沖縄戦を経て、米軍統治下の戦後沖縄の社会において、米軍人向けの土産物から出発し、沖縄の本土「復帰」や復興ともない、観光客向けの土産物や、沖縄県内の贈答品として興隆したものです。琉球人形をインスタレーションのかたちで提示することは、すなわち、沖縄の戦後経験

の歴史的・文化的な交差性について、観る者に考えを促すものであり、極めて興味深い作品となっていました。

ひがれおさんの今回の展示は、日本国内外のアートシーンにインパクトを与えるものであり、沖縄を拠点にする気鋭の美術家として、今後のさらなる活躍が楽しみです。



「六本木クロッシング2025展：時間は過ぎ去る わたしたちは永遠」
森美術館（東京）2025-2026年
撮影：竹久直樹 画像提供：森美術館（東京）



美術工芸学部 工芸専攻 イギリス・ノリッジ Okinawan Kogei 展

Okinawan Kogei展は、イギリスのイングランド東部に位置するノリッジ市（The Cryptギャラリー）で開催されました。本展覧会は、沖縄県立芸術大学（工芸専攻）とイースト・アングリア大学、セインズベリー日本藝術研究所、ノリッジ芸術大学の初のコラボレーションで、イギリス国内で初めてのまとまった現代沖縄工芸展となりました。日本最南端の沖縄に焦点を当て、特有の豊かな歴史や文化を取り上げ、これまで本土文化に偏重しがちだった従来の美術史の枠組みに一石を投げ、地域の多様性を再評価するきっかけを作りました。

工芸専攻教員8名（染・織・陶芸・漆芸）の作品が展示されると同時に、ノリッジ芸術大学では工芸を直接体験できるワークショップも開催され、沖縄の工芸に触れる貴重な機会を提供しました。さらに、芸術学専攻・小林純子先生の講演会を通じて、沖縄文化の背景への理解を深めるだけでなく、海外においても日本研究の視野を広げ、日本の芸術文化の多様性と地域性の重要性を示すことができました。



展覧会 会期：2025年10月29日(水)～11月1日(土)

ワークショップ：2025年11月1日(土)

講演会：2025年11月3日(月)

ドイツの風に声を乗せて——遙かなる音楽への旅路

重島 清香



撮影：Sandra Then

懐かしい母校のキャンパスを思う時、西洋音楽の本場への憧れだけで生きていた日々が蘇ります。練習室の窓から空を見上げ、ただひたすらに「留学」という夢を追いかけていた大学時代。

念願かなって踏み入れたドイツでの生活は、想像を絶する厳しさでした。学業と生活の両立に追われ、言葉の壁や文化の違い、何より「異邦人」として生きるハンディキャップが重くのしかかりました。自分の思いが伝わらないもどかしさや孤独に押しつぶされそうな夜もありましたが、その苦悩の日々こそが、私を人間として鍛え上げる土台となりました。

そんな修行時代、私の音楽人生を変える出会いがありました。憧れの歌手ブリギッテ・ファスベンダー氏の講習会です。彼女の指導を通じ、私は「人間そのものが楽器である」という真髄に触れました。歌うとは単に声を出すことではなく、生きている身体、感情、経験の全てを共鳴させることだと開眼したのです。また、現地の空気感を知ることで音楽観も一変しました。冬の鉛色の空や風の冷たさ、森の匂いがドイツ語の詩とリンクし

た時、楽曲への理解が劇的に深まり、言葉に血が通い始めたのです。

その後、劇場の専属ソリストとしてプロの戦いが始まりました。舞台を務める責任は重く、楽器である心身の維持管理は至上命題です。華やかなカーテンコールの裏側にある、孤独で地道な節制の日々。その厳しさに身を置くことで、私は音楽家としての覚悟を深めていきました。

音楽の道にゴールはありません。今、学生時代に愛用したオペラアリア集に記されていたマリア・カラスの言葉が、かつてない重みを持って胸に響きます。

"Nel canto, siamo studenti fino alla morte."
(歌において、私たちは死ぬまで学生なのです)

当時は漠然と眺めていた一文ですが、どれだけ経験を積んでも、音楽の前では私たちは永遠に徒弟であり、学ぶ身なのだと思えます。私の情熱は尽きません。これからこの地の経験を糧に、人間という楽器を磨き続け、果てしない学びの道を歩んでいきたいと思えます。

第36回洋楽定期公演

日時：2025年10月12日（日）
場所：沖縄県立芸術大学 奏楽堂ホール

弦楽アンサンブルの進化と軌跡
—前衛から伝統へ、弦楽四重奏への道—



プログラム

J.S. バッハ：ゴルドベルク変奏曲（弦楽三重奏版 D. シトコヴェツキー編）より
J. ハイドン：弦楽四重奏曲 第3番 二長調 Op. 1-3 より
W.A. モーツァルト：弦楽四重奏曲 第3番 長調 Kv. 156 より
O. レスピーギ：リュートのための古風な舞曲とアリア 第3組曲
L.v. ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第15番 イ短調 作品132

出演：沖縄県立芸術大学弦楽オーケストラ

第36回琉球芸能定期公演

日時：2025年11月8日（土）
場所：沖縄県立芸術大学 奏楽堂ホール

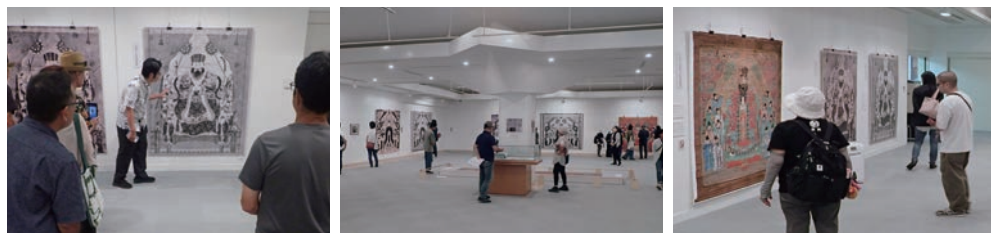


演目

斉唱「天川節」「仲順節」（安富祖流）
舞踊「上り口説囃子」 作舞：宮城美能留
舞踊「早口説」 作舞：瀬名波孝子
独唱「赤田風節」「子持節」
斉唱「稲まづん節」「早作田節」（野村流）
独唱「赤田風節」
組踊「孝行の巻」 作：玉城朝薫



令和7年度 附属図書・芸術資料館 企画展 御後絵展—鎌倉芳太郎写真の高精細画像を中心に—



「御後絵（おごえ）」は琉球国王の死後に描かれた肖像画で、王家の菩提寺である円覚寺で管理されていました。琉球処分以降には、王家の屋敷であった中城御殿で第二尚氏の歴代国王や王子の御後絵が保管されていましたが、1945（昭和20）年の沖縄戦後の混乱期に所在不明となりました。その後長きにわたり、鎌倉芳太郎が大正時代に撮影したモノクロ写真が御後絵の実像を伝える唯一の資料とされてきました。

ところが、戦後79年を経た2024（令和6）年3月に、御後絵の実物4件がアメリカから返還されて大きな注目を集め、現在は修復作業が進められています。

本展では、鎌倉芳太郎が大正時代に撮影したガラス乾板を、東京文化財研究所の最新のデジタル技術によって撮影して作った高精細デジタル画像を用いて作成した御後絵の原寸大写真パネルを初公開しました。あわせて、重要文化財に指定されている御後絵の紙焼き写真や、昨年帰国した4件の御後絵のデジタル写真なども展示しました。12日間（10月23日—11月3日）の会期中には、本学芸術文化研究所の共同研究員・平川信幸氏によるギャラリートークも開催。展覧会全体の来場者は延べ2,070人にのぼり、盛況のうちに幕を閉じました。

芸術文化研究所



移動大学 in 座間味島「地域芸能文化交流会」

芸術文化研究所では移動大学や文化・公開講座の開講、しまくとぅば実践教育プログラムの開発事業を行っています。令和7年度は、移動大学 in 座間味島、文化講座「沖縄芸術文化に画期を拓いたイベント」、「第2回空手・琉球の武術を学ぶ—研究の視点から—」、「腰機入門-紹織編-」、「パリの伝統舞踊（男性舞踊）（女性舞踊）」「ガムラン体験講座（ジャワ・バリ）」を開催いたしました。移動大学では座間味島に赴き、琉球舞踊教室や粘土アニメ教室などの教室を開講するとともに地域文化芸能交流会を開催しました。

しまくとぅば事業 芸術文化研究所では沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育開発事業として、文化講座「沖縄芸術文化に画期を拓いたイベント」（全14回）では、戦後沖縄の芸術文化にとって重要な諸イベントの開催経緯と、その後の芸術文化各分野に及ぼした影響について紹介しました。令和7年4月11日～9月30日までオンデマンドでの



文化講座「パリの伝統舞踊」

動画公開も実施し、県内外から延べ1500回以上の視聴がありました。

文化講座「第2回 空手・琉球の武術を学ぶ—研究の視点から—」では、空手を中心とした琉球・沖縄の武術文化について、歴史・秘伝書・芸能の3つの分野から専門家を招いて開催しました。どの講座も新たな視点からテーマに迫っており、同講座の継続した開催に期待の聲が寄せられました。

しまくとぅば事業 芸術文化研究所では沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育開発事業として、音楽学部琉球芸能専攻と協力してしまくとぅばを積極的に用いた講義を行なっています。今年度は琉球舞踊八擘流餘音の会 家元である前田千加子先生をお招きし講演会を実施しました。



第17回しまくとぅば講演会

令和7年度 沖縄県立芸術大学 美術工芸学部

【絵画】

我喜屋瑠倭、栗田大輝、柴崎琳子、鳥越星葉、西田悠那 (学部2年) 第54回沖縄県芸術文化祭 入選
 小野雛子、我喜屋瑠倭 (学部2年) 第57回新潟市展 入選
 西田悠那 (学部2年) 第25回福知山市佐藤太清賞公募美術展 日本画の部 入選
 柴崎琳子 (学部2年) 第18回なは市民芸術展 那覇市長賞
 金城妃美佳 (修士2年) 第18回なは市民芸術展 奨励賞
 小野雛子、我喜屋瑠倭、栗田大輝 (学部2年) 第18回なは市民芸術展 入選
 楠本みのり、大橋侑奈 (修士2年) 第18回なは市民芸術展 入選
 SUDEGERILE、町田隼人 (修士1年) 第18回なは市民芸術展 入選
 大城佳乃子 (修士2年) 第13回郷さくら美術館 桜花賞展 奨励賞
 杉山遥香、金楚皓 (修士2年) 第10回 石本正日本画大賞展 入選
 岡田絵汀 (修士1年) 第10回 石本正日本画大賞展 入選
 渡邊帆高 (学部4年) 第50回記念全国大学版画展 町田市立国際版画美術館賞・鹿沼市立川上澄生美術館賞
 黒田唯斗 (学部4年) 第77回沖縄展 (絵画部門) e-n-o 新人賞
 野田日菜、屋良美稀乃、垣花優那、田上いまり、玉榮葉奈子 (学部3年) 第77回沖縄展 (絵画部門) 入選
 柴崎琳子、鳥越星葉、西田悠那、栗田大輝、我喜屋瑠倭 (学部2年) 第77回沖縄展 (絵画部門) 入選
 深瀬千和、松島朝済、米丸葉奈乃、吉村はな、野原ツツエオ摂理、山城聖菜、當眞大煌 (学部1年) 第77回沖縄展 (絵画部門) 入選
 曹婷婷 (博士2年) 第77回沖縄展 (絵画部門) 入選
 名嘉春香 (学部2年) 第77回沖縄展 (グラフィックデザイン部門・版画部門) e-n-o 新人賞

【彫刻】

秦佳琦 (修士1年) 第77回沖縄展 (彫刻部門) 優秀賞
 勝間田月乃 (学部4年) 第46期国際瀧富士美術賞 優秀賞
 松本幸晟 (学部4年) 第37回 沖縄県立芸術大学 卒業・修了作品展 北中城村文化協会賞
 三浦彩華 (学部4年) 第37回 沖縄県立芸術大学 卒業・修了作品展 沖縄県立博物館・美術館長賞
 勝間田月乃 (学部4年) 第37回 沖縄県立芸術大学 卒業・修了作品展 専攻賞
 松本幸晟 (学部4年) 令和7年度 西銘順治賞

【工芸】

<染分野>
 島田 洋美 (学部2年) 第77回 沖縄展 (絵画部門) 入選
 船道 愛音 (学部2年) 第77回 沖縄展 (染色部門) 入選
 子安 崇文 (学部4年) 第37回 沖縄県立芸術大学卒業・修了作品展 専攻賞
 平田 亜優 (修士2年) 第37回 沖縄県立芸術大学卒業・修了作品展 専攻賞
 <織分野>
 西濱 萌 (学部2年) 第77回 沖縄展 (染色部門) e-no 新人賞
 金城 佑佳 (学部4年) 第37回 沖縄県立芸術大学卒業・修了作品展 専攻賞 / 西銘順治賞
 大月 凧 (修士1年) 第2回 京都クラフトアンドデザインコンペティション「TRADITION for TOMORROW」学生部門賞
 石川 友紀子 (修士1年) 第79回 新匠工芸会展 (染織部門) 入選
 森田 希鈴 (修士2年) 第37回 沖縄県立芸術大学卒業・修了作品展 北中城村長賞
 新垣 萌々 (修士2年) 第79回 新匠工芸会展 (染織部門) 奨励賞 / 第37回 沖縄県立芸術大学卒業・修了作品展 買上げ賞 / 第8回 沖縄県立芸術大学大学院造形芸術研究科展 at OIST CYCLE展 創造するエネルギー2025* OISTピープルズチョイスアワード賞 / 第59回 西武伝統工芸展 入選 / 山本正男賞
 <陶芸分野>
 潮田 尊愛 (学部4年) 第37回 沖縄県立芸術大学卒業・修了作品展 買上げ賞
 Tan Jia Xuan (学部4年) 第37回 沖縄県立芸術大学卒業・修了作品展 沖縄美ら島財団理事長賞
 佐藤翼 (修士2年) 第37回 沖縄県立芸術大学卒業・修了作品展 デパートリウボウ賞

【デザイン】

尾上ひいろ (学部2年) 第7回丹波アートコンペティション 入選
 安里すずら (学部2年) エプソンフォトグランプリ 学生賞
 下川紗葉 (学部3年) 日本パッケージデザイン学生賞2025 入選 / 年賀状2026デザインコンテスト 佳作
 張浩冬 (修士2年) 第77回沖縄展 (グラフィックデザイン部門) うるま市長賞・入選
 多和田愛琴 (学部2年) 第77回沖縄展 (グラフィックデザイン部門) 入選
 仲地涼 (修士2年) 第77回沖縄展 (グラフィックデザイン部門) 入選
 LLU QIFEI (修士2年) 第77回沖縄展 (グラフィックデザイン部門) 入選
 松田亘 (学部4年) 第37回 沖縄県立芸術大学 卒業・修了作品展 専攻賞
 國古すみれ (学部4年) 第37回 沖縄県立芸術大学 卒業・修了作品展 専攻賞

令和7年度 沖縄県立芸術大学 音楽学部

【音楽表現専攻・演奏芸術専攻】

【ピアノコース】
 中村 倫 (2年) JPTA日本ピアノ教育連盟オーディション D部門 地区大会優秀賞
 横田 美羽 (2年) JPTA日本ピアノ教育連盟オーディション D部門 地区大会奨励賞 / 第19回ベートン音楽コンクール 全国大会 自由曲コース / 大学・院生A ピアノ部門 ベスト20賞
 神 来留美 (3年) JPTA日本ピアノ教育連盟オーディション D部門 地区大会エフォート賞 / 第10回ベートーヴェン国際ピアノコンクールアジア沖縄予選E部門 優良賞
 正本 乃愛 (2年) JPTA日本ピアノ教育連盟オーディション D部門 地区大会エフォート賞
 三瓶 心 (1年) 第27回シヨパン国際ピアノコンクール in Asia 大学生部門全国大会 奨励賞
 【ピアノ専修】
 高江洲 愛奏 (院1) JPTA日本ピアノ教育連盟オーディション D部門 地区大会優秀賞 / 第35回日本クラシック音楽コンクール全国大会ピアノ部門 大学女子の部 入選
 仲宗根 和志 (院1) JPTA日本ピアノ教育連盟オーディション E部門 地区大会優秀賞
 崎濱 杏 (院2) JPTA日本ピアノ教育連盟オーディション D部門 地区大会奨励賞
 林 陽菜 (院1) JPTA日本ピアノ教育連盟オーディション E部門 地区大会奨励賞
 當山 涼 (院1) JPTA日本ピアノ教育連盟オーディション E部門 地区大会奨励賞
 新城一大 (院1) 第54回堺市新人音楽コンクール 優秀賞
 【声楽コース】
 風間 新菜 (2年) プリマヴェーラ声楽コンコロソ 地区大会 優秀賞 同コンコロソ 東日本準本選 第1位

【管弦打楽専修】

大沼花音 (院2・打楽器) 第35回日本クラシック音楽コンクール打楽器部門 大学の部 第4位 (第1位、第2位なし) / 第4回日本国際音楽コンペティショングランプリファイナル打楽器部門第2位

【管打楽コース】

仲村爽 (4年・打楽器) 第8回東京国際マリンバコンクール 第6位 / 第31回K O B E国際音楽コンクール打楽器C部門 奨励賞
 山城颯叶 (3年・打楽器) 第35回日本クラシック音楽コンクール打楽器部門 大学の部 入選

【琉球芸能専攻・舞台芸術専攻】

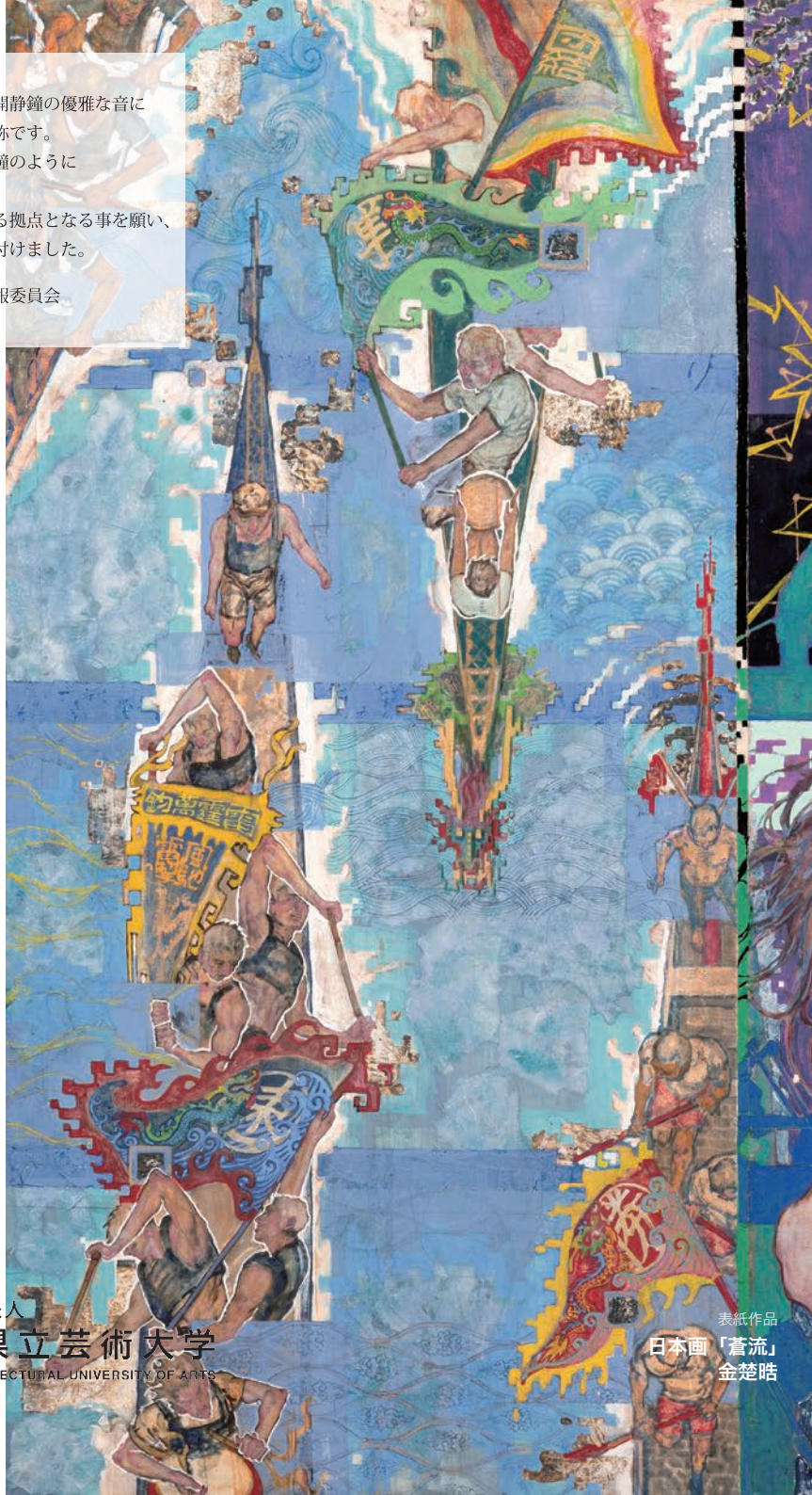
亀甲谷宝 (学部1年) 2025年度沖縄タイムス伝統芸能選考会 最高賞 (琉球舞踊) / 2025年度沖縄タイムス伝統芸能選考会 優秀賞 (太鼓)
 伊江里菜子 (学部1年) 2025年度沖縄タイムス伝統芸能選考会 最高賞 (三線) / 2025年度沖縄タイムス伝統芸能選考会 最高賞 (箏曲) / 2025年度沖縄タイムス伝統芸能選考会 最高賞 (笛) / 2025年度沖縄タイムス伝統芸能選考会 最高賞 (胡弓) / 2025年度沖縄タイムス伝統芸能選考会 最高賞 (太鼓)
 山根由奈 (学部1年) 2025年度沖縄タイムス伝統芸能選考会 優秀賞 (琉球舞踊)
 大城千夏 (学部2年) 琉球新報社第59回琉球古典芸能コンクール 最高賞 (琉球舞踊)
 仲間功也 (院1年) 2025年度沖縄タイムス伝統芸能選考会 最高賞 (琉球舞踊)
 亀谷澤壮 (学部3年) 琉球新報社第59回琉球古典芸能コンクール 優秀賞 (琉球箏曲)
 藤島弘美 (学部4年) 2025年度 沖縄タイムス伝統芸能選考会 優秀賞 (琉球舞踊)
 崎山華楓 (学部1年) 2025年度沖縄タイムス伝統芸能選考会 新人賞 (太鼓)
 伊禮真実 (研究生) 2025年度沖縄タイムス伝統芸能選考会 グランプリ (箏曲)
 山城美帆 (研究生) 第59回琉球古典芸能コンクール 優秀賞 (琉球箏曲)
 山田健太 (学部2年) 2025年度沖縄タイムス伝統芸能選考会 新人賞 (太鼓)
 山城祐介 (学部1年) 第59回琉球古典芸能コンクール 新人賞 (琉球箏曲)

開鐘 (KE-JOU)

開鐘とは、明け六つの開静鐘の優雅な音にとえられた三線の尊称です。
沖縄県立芸術大学も開鐘のように
遙か彼方まで鳴り響き、
世界に向かって飛躍する拠点となる事を願い、
広報誌を「開鐘」と名付けました。

沖縄県立芸術大学 広報委員会

2026年5月15日発行



公立大学法人
沖縄県立芸術大学
OKINAWA PREFECTURAL UNIVERSITY OF ARTS

表紙作品

日本画
「蒼流」
金楚皓